

範囲確認調査報告書

Hashimuregawa-archaeological site

橋牟礼川遺跡XV

Shikiryo-archaeological site

敷領遺跡

The remains of Tonosamayu

殿様湯跡

2000年3月

鹿児島県指宿市教育委員会





## 例　　言

1. 本書は、平成11年7月1日から平成12年3月31日まで実施した鹿児島県指宿市に所在する橋牟礼川遺跡、敷領遺跡、駿様湯跡の確認調査報告書である。

2. 調査、及び整理・報告書作成に要した経費3,000,000円のうち、1/2は国、1/4は県からの補助を得て行った。

3. 調査は、指宿市教育委員会が実施し、下山　覚、中摩浩太郎、渡部徹也、鎌田洋昭が担当した。

本書の編集、遺構・遺物の原図作成、製図については渡部徹也が主に行い下山覚、中摩浩太郎、鎌田洋昭の協力を得た。本文執筆・編集については、渡部徹也が担当し、下山覚、中摩浩太郎、鎌田洋昭の教示を得た。写真撮影については、渡部徹也が主に行い、下山覚、中摩浩太郎、鎌田洋昭の協力を得た。なお、製図作業において、前田恵子、清秀子、竹下珠代の協力を得た。

調査の組織は以下のとおりである。

発掘調査責任者	指宿市教育委員会	教育長	山下隼雄
発掘調査担当	指宿市教育委員会	社会教育課長	室屋昭男
		社会教育係長	馬場隆男
		派遣社会教育主事	原口　洋
		社会教育係主査	川畑忠晴
		社会教育係参事補	木之下明夫
		社会教育係主事	岩下まり子
		文化係長	小村重志
		文化係主査	寺田昭宏
		文化係主事	大道裕子
発掘調査員	文化係主査　下山　覚、同主査　中摩浩太郎、同主事　渡部徹也、同主事　鎌田洋昭		
発掘調査作業員	上原節男、浜崎いち子、井上ヒサ子、東　富子、林山イネ、竹下カツエ、吉元トシエ、新小田千恵子、今村律子、佃幸代、奥齒信子、小路口敬子、中林けい子、安留昇、米倉順子、宮田加奈子、片平育美		
整　理　作業員	前田恵子、清秀子、竹下珠代		

4. 本書のレベルはすべて絶対高である。また、図中に用いられている座標値は国土座標系第9系に準ずる。

5. 本書の層位・遺物の色調名、破片形状表記基準、含有物の占有面積表記基準は、「標準土色帖」1990年版に基づく。遺物観察表、遺物実測図の表記凡例は「橋牟礼川遺跡Ⅲ」(1992)に準ずる。観察表の特殊な表記については、下記の通りである。

土器残存・法量【口：口縁部径、肩：肩部最大径、胴：胴部最大径、底：底部径】

色調【外：外面、内：内面、肉：器肉】

混和材【カ：角閃石、セ：石英、白：白色粒、黒：黒色粒、赤：赤色粒、金：金雲母】

調整【内：内面、外：外面、口唇：　口唇部、突：突起部、底：底面、脚内：脚台内面、脚端：脚台接地面】

6. 調査で得たすべての成果については、指宿市考古博物館「時遊館C O C C O はしむれ」でこれを保存・活用している。

## 本文目次

橋牟礼川遺跡範囲確認調査編	敷領遺跡確認調査編
第1章 遺跡の位置と環境	第1章 遺跡の位置と環境
第2章 遺跡の層位	第2章 確認調査
第3章 確認調査	第1節 遺構について
第4章 橋牟礼川遺跡発掘調査史	第2節 遺物について
第5章 調査成果のまとめ	第3章 調査成果のまとめ

## 挿図目次

Fig. 1 指宿市の位置	1
Fig. 2 遺跡の位置	1
Fig. 3 遺跡の位置	1
Fig. 4 調査地点位置図	2
Fig. 5 層位模式柱状図	3
Fig. 6 調査地点北壁層位断面図 (S = 1/25)	4
Fig. 7 調査地点位置図	5
Fig. 8 トレンチ全体図・第6層上面遺構検出状況図 (S = 1/25)	5
Fig. 9 破壊状造構平・断面図 (S = 1/25)	6
Fig. 10 土壌硬度試験範囲 (S = 1/25)	7
Fig. 11 範囲確認調査地点図と検出された遺構1 (S = 1/30)	13-14
Fig. 12 範囲確認調査地点図と検出された遺構2 (S = 1/30)	15-16
Fig. 13 敷領遺跡調査地点位置図 (S = 1/600)	17
Fig. 14 調査区層位断面図 (S = 1/40)	18
Fig. 15 第6層上面水田検出状況図 (S = 1/100)	19
Fig. 16 水田平・断面図 (S = 1/25)	20
Fig. 17 第6層b上面で検出した溝状遺構 (S = 1/100)	21
Fig. 18 第6層b上面で検出した溝状遺構平・断面図1 (S = 1/40)	22
Fig. 19 第6層b上面で検出した溝状遺構平・断面図2 (S = 1/40)	23-24
Fig. 20 第7層上面で検出した柱穴と第6層遺物出土状況図 (S = 1/100)	25
Fig. 21 第7層上面で検出した柱穴平・断面図 (S = 1/20)	25
Fig. 22 出土遺物実測図 (S = 1/3)	26
Fig. 23 殿様湯跡位置図 (S = 1/2500)	29
Fig. 24 調査地点位置図 (S = 1/500)	29

## 表目次

表1 橋牟礼川遺跡発掘調査史	8
表2 遺物観察表	27

## 写真図版目次

PL. 1 橋牟礼川遺跡確認調査地点	31
PL. 2 敷領遺跡確認調査地点	32
PL. 3 殿様湯跡確認調査地点	34
PL. 4 敷領遺跡出土遺物	35

# 橋牟礼川遺跡編



## 第1章 遺跡の位置と環境

国指定史跡指宿橋牟礼川遺跡は、指宿市十二町下里に位置する。遺跡は、山裾から海岸に向けて緩やかに傾斜する海拔10~20m前後の火山性扇状地上にあり、遺跡の南西約10kmにある開聞岳噴火によって、度重なる被害を被ってきた火山災害遺跡として知られている。範囲確認調査は、平成3年度から年次的に実施され、遺跡の広がりと内容が確認されてきた。その成果は表1に記す通りである。平成7年度には、調査成果に基づき、約1.8haが国指定史跡の追加指定を受けた。7年度以降は、これまでに引き続き国指定史跡周辺の遺跡の所在と性格を把握するために確認調査を実施しており、本年度は国指定史跡北西側の近接地點にトレンチを設定した。(文責 渡部)

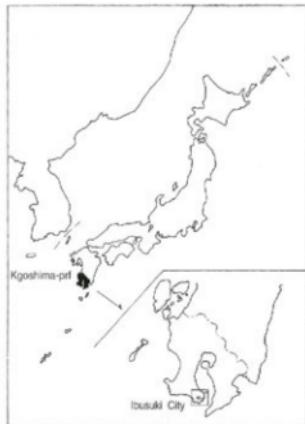


Fig. 1 指宿市の位置



Fig. 2 遺跡の位置 1

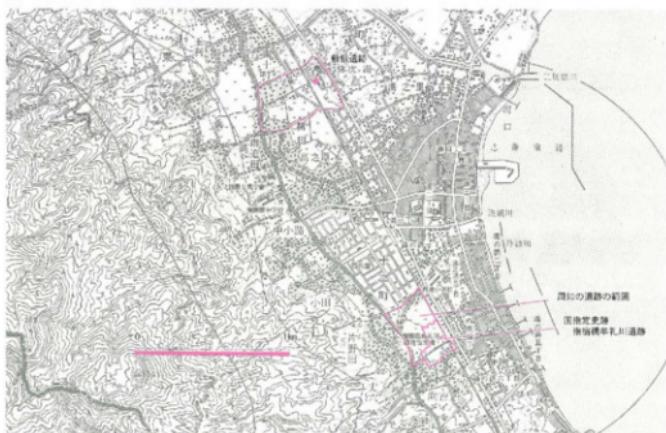
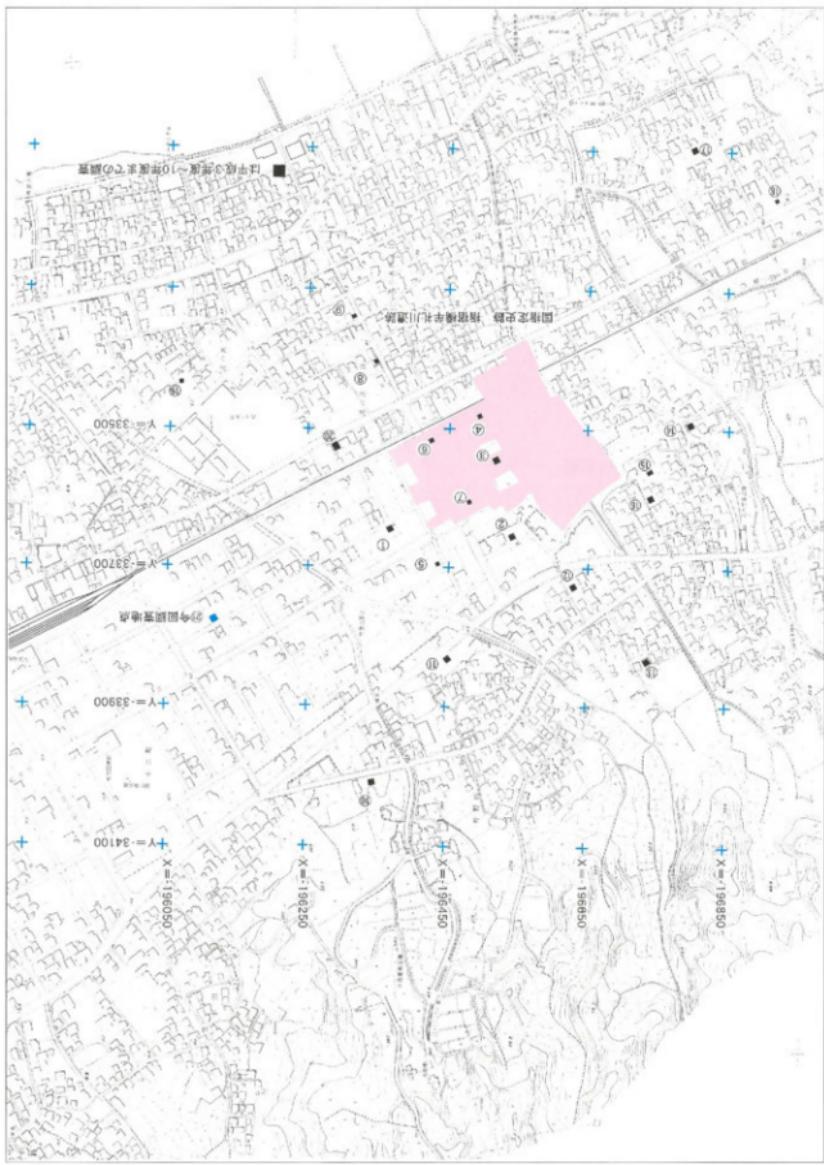


Fig. 3 遺跡の位置 2

Fig. 4 圖資地點位置圖



## 第2章 遺跡の層位



指宿市教育委員会『第Ⅳ章 遺跡の層序』「橋牟礼川遺跡Ⅲ」を抜粋、一部改変。

Fig. 5 層位模式柱状図

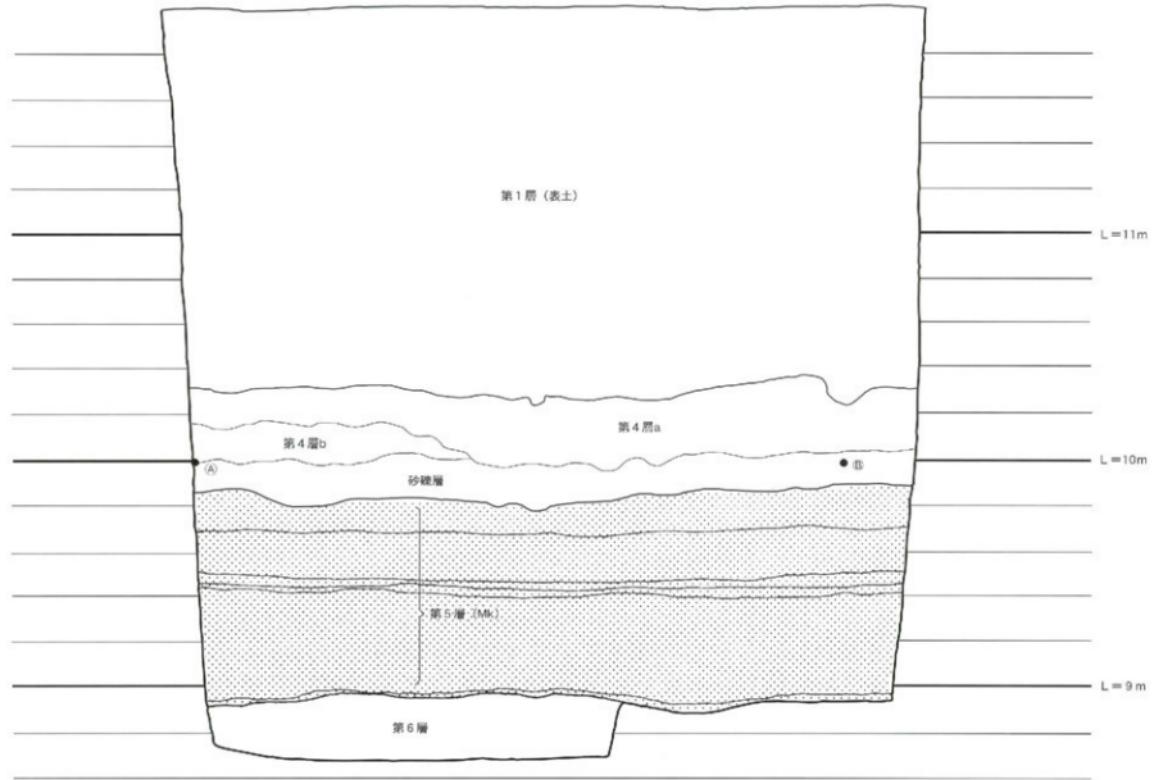


Fig. 6 調査地点北壁層位断面図 ( $S = 1 / 25$ )

## 第3章 確認調査

### 第1節 調査の概要

国指定史跡の北西側約300mの地点に5.5×6.5mのトレンチを1箇所設定し、確認調査を実施した。現地表から、約2m掘り下げたところで、中世の遺物包含層（第4層）を検出し、その下層に西暦874年の開聞岳の噴火に伴う火山灰（以下Mkと表記）を確認した。Mkは、2次堆積物も含め、約1.2mの厚さがあり、最下部には、1次噴出物の火山礫が堆積していた。

Mk直下の第6層上面は、波状のうねりがあり、凹部の底面が一部硬化していたことから、島の境界部分か、あるいは畝状造構と畝間の一部を検出したものと考えられる。

造構面までは、現地表から約3mあり、調査面積が狭かったため、下層の状況は確認することが困難と判断し、記録作業後、埋め戻した。なお、遺物の出土はみられなかった。



Fig. 7 調査地点位置図 ( $S = 1/1000$ )

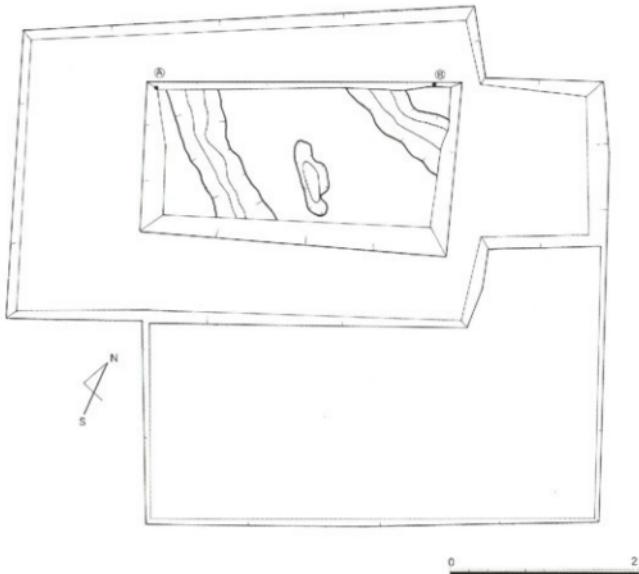


Fig. 8 トレンチ全体図・第6層上面遺構検出状況図 ( $S = 1/25$ )

## 第2節 遺構について

874年の開闢岳火山灰直下にある第6層上面で溝状遺構が確認された。ほぼ北西—南東に伸びる2条の溝は上場の幅で40~50cmを計り、約10cmほどU字状に窪む。2条の溝は、主軸を若干異にしている。そのほぼ中間地点にも北西—南東に長軸をもつ浅い楕円形の窪みが確認された。溝に挟まれた部分は、浅い楕円形の窪みの部分を除いて、ほぼ平坦である。

橋牟礼川遺跡では、畠頭と畠間の高低差が20cm前後を計り、幅が60cm~1m程度で断面がかまぼこ状になる畠と畠頭と畠間の高低差が数cmで緩やかな波状の起伏として確認される畠との2種類が確認されている。また、畠状の盛土を作り出し、その脇に幅20~30cm前後の道路遺構がはしる島の境界も検出されている。

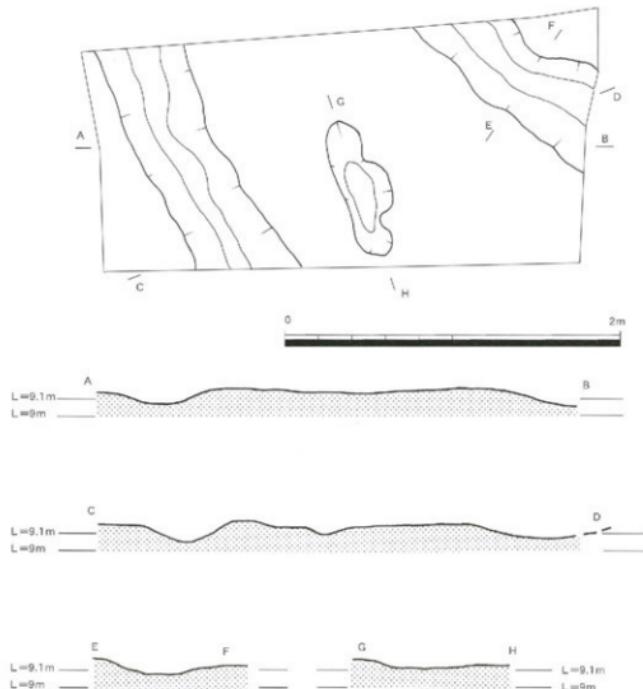


Fig. 9 畠状遺構平・断面図 ( $S = 1/25$ )

今回検出された遺構は全体形状が不明なため断定はできないものの、溝に挟まれた畝状のマウンドの幅が広くその上面がほぼ平坦であることや溝の底面が硬化しており道として利用されたと考えられることから、畠地の境界の一部を検出した可能性が高い。

溝状遺構についてはその底面の硬度を客観的に把握するため、山中式土壤硬度計を用いて土壤硬度試験を実施した。測定方法は、溝状遺構を挟むように盛土の部分も含め無作為に10×90cmのグリッドと10×70cmのグリッドの2個所を設定し（Fig.10中のA B、C D）10cmメッシュ中3点を計測、その平均値を支持強度P値に換算し数値をFig.10の図中に記載した。

その結果、溝状遺構の底面は、17.56の値を周辺の盛土部について5.81の値を得る約3倍の硬度を有することが判明した。これまで橋牟礼川遺跡で検出されている畝間の底面は、はっきりとした硬化面が形成されていることがほとんどないことからも、この溝状遺構は畠地の境界の道として利用された可能性が高いと考えられる。

（文責 渡部）

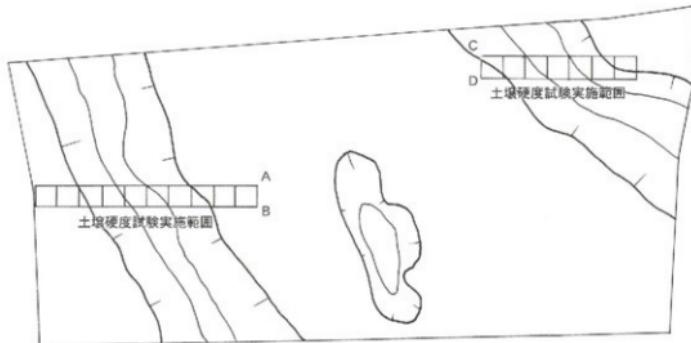


Fig. 10 土壤硬度試験範囲

#### 第4章 橋牟礼川遺跡発掘調査史

橋牟礼川遺跡は、大正13年に指定された国指定史跡橋牟礼川遺跡および、その周辺の周知の埋蔵文化財包蔵地を含む総称である。国指定国指定史跡内の発掘調査については、大正13年、昭和23年、同49年、同50年、同54年、同58年に実施され、縄文時代から近・現代までの複合遺跡であることや、度重なる開闢岳の噴火による火山灰等で埋もれた火山災害遺跡であることなどの価値が付加してきた。

また、昭和61年度から平成3年にかけて、国指定史跡の北側隣接地において、土地区画整理事業が行なわれ、そ

れに伴う発掘調査が実施された。また、平成2～3年には、下水道管敷設事業に伴う発掘調査が行なわた。

その結果、国指定史跡で確認されてきたものと一連の古墳時代の集落群や平安時代の集落などが発見され、国指定史跡と同様の遺跡が面的に存在していることが確認された。

平成3年度から遺跡の広がりと内容をさらに把握するために範囲確認調査が実施された。特に、貞觀16年旧暦3月4日（西暦874年3月25日）の開闢岳噴火に伴う噴出物の直下には、被災日が特定される遺構群が発見され、日付の特定が行える遺跡として、広く注目を集めるとともに、古墳時代の集落の中心部分の広がりも把握することができた。こうした調査成果に基づき、平成7年度には、約1.8haが国指定史跡の追加指定を受けた。平成8年度以降は、国指定史跡周辺の遺跡の所在とその性格、基本層序の広がりを把握するために確認調査が継続され、遺跡の範囲をほぼ把握することが可能となった。

大正7年に始まった橋牟礼川遺跡の発掘調査は、今回で34次を数え、昭和54年に公有地化した2.36ha部分については、すでに史跡整備を終えている。また、調査成果については、平成8年度に開館した指宿市考古博物館時選館COCICOはしむれで、これを保存・公開・活用し、現在に至っている。

表1 橋牟礼川遺跡発掘調査史

No.	年	発掘調査事業名	調査主体	調査担当者	翻訳	調査期間	主な調査成果
1	大正7年 1918	浜田耕作博士らによる学術発掘調査	京都帝國大学	浜田耕作（京都帝國大学）、長谷部言人（東北帝國大学）	不詳	大正7年1月	火山灰をはさんで上層に弥生土器、下層に縄文土器を確認。縄文土器が弥生土器よりも古い時代の土器であることを実証した。
2	大正8年 1919	浜田耕作博士らによる学術発掘調査	京都帝國大学	浜田耕作（京都帝國大学）、長谷部言人（東北帝國大学）	不詳	大正8年4月	橋牟礼川遺跡が「日本のポンペイ」と称せられ、日本で最も早く火山災害遺跡として認識された。
3	昭和23年 1948	鹿児島県立公園候補地学術調査	鹿児島県	山崎五十窓、寺崎見	不詳	昭和23年2月	縄文土器、弥生土器包含層に加え、貝塚（古墳時代）が発見された。
4	昭和49年 1974	史跡指定現状変更許可申請に伴う埋蔵文化財発掘調査	指宿市	河野治雄（指宿高校教諭）、上村俊雄（ラ・サール高校教諭）、坂田邦洋（長崎大学医学部）、佐土原逸男（学生）、中村耕治（学生）、本田道輝（学生）	53	昭和49年2月25日～3月11日	平安時代の土孔墓から幼児骨など5体が検出された。また、縄文から平安に至る各時代の文化層、火山灰層が確認され、縄文～弥生期の住居跡、古墳時代の土器集中廐棄所などの遺構や土器、鉄器、石器等の遺物が出土した。
5	昭和50年 1975	橋牟礼川遺跡包含地の現状申請に伴う発掘調査	指宿市	安部義平（文化庁文化部技官）、河野治雄（鹿児島県教委文化課）、中村耕治（同上）、佐土原逸男（指宿市教育委）、内藤芳篤（長崎大学医学部）、石川秀雄（鹿児島大学教育学部教授）、旭慶男（学生）	70	昭和50年2月3日～2月18日	同 上

No.	年	発掘調査事業名	調査主体	調査担当者	賃額	調査期間	主な調査成果
6	昭和54年 1979	都市計画事業に伴う確認調査	指宿市	弥栄久志（鹿児島県教委文化課）、中島哲郎（同上）、井ノ上秀文（同上）	308	昭和54年10月22日～12月1日	橋牟礼川遺跡（国指定史跡を含む）の広がりが10ha以上に及ぶことが確認された。また、仁和元年、貞觀16年の開闢岳噴火に対応する火山灰層の比定がなされ、浜田耕作博士の見解を追認した。
7	昭和58年 1983	国指定史跡環境整備事業に伴う確認調査	指宿市	吉永正史（鹿児島県教委文化課）、紫川正幸（同上）、中村耕治（同上）	172	昭和58年2月21日～3月31日	古墳時代の土器、石器、鐵器の遺物、住居跡や貝塚などの遺構が検出され、同時代の集落の内容が極めて多彩であることが予想された。
8	昭和61年 1986	国指定史跡環境整備事業に伴う確認調査	指宿市	中村耕治（鹿児島県教委文化課）、柴畠光博（指宿市教委）	95	昭和61年5月6日～6月30日	古墳時代の住居跡やV字溝、鍛冶に伴う遺物が検出され、南九州の古墳時代の実態を示す新たな資料が加えられた。また、平安時代の鉄器、須恵器、土器等、火山灰直下の植物遺体等も出土した。
9	昭和61年 1986	都市計画事業に伴う発掘調査（幹線道路部分）	指宿市	中村耕治（鹿児島県教委文化課）、柴畠光博（指宿市教委）	700	昭和61年7月10日～昭和62年3月20日	貞觀16年の開闢岳噴火に伴う土石流堆積物で埋め尽くされた旧河川が発見された。
10	昭和62年 1987	都市計画事業に伴う発掘調査（幹線道路部分）	指宿市	中村耕治（鹿児島県教委文化課）	490	昭和62年6月1日～昭和63年1月30日	国指定史跡内で検出されている古墳時代住居跡と同時期の大集落が発見され、一連の遺跡の内容が国指定史跡外にも広がることが確認された。
11	昭和63年 1988	都市計画事業に伴う発掘調査（幹線道路部分）	指宿市	下山覚（指宿市教委）、富田逸郎（鹿児島県教委文化課）	350	昭和63年7月4日～平成元年1月30日	古墳時代の集落跡を検出、3種類の平面プランがあることが確認された。また、子持まがたまが出土した。平安時代では874年の火山灰によって倒壊、埋没した建物跡が検出された。
12	昭和63年 1988	温泉源移転に伴う確認調査	指宿市	下山覚（指宿市教委）	16	昭和63年4月25日～5月20日	古墳時代の集落の広がりが確認された。
13	平成元年 1989	温泉源移転に伴う確認調査	指宿市	下山覚（指宿市教委）	100	平成元年4月20日～6月30日	橋牟礼川遺跡の文化層がコンスタントに18層あることが確認された。874年の噴火で埋没した林跡が検出された。
14	平成元年 1989	都市計画事業に伴う発掘調査（幹線道路部分）	指宿市	下山覚（指宿市教委）、富田逸郎（鹿児島県教委文化課）	350	平成元年4月20日～平成2年3月29日	旧河川の蛇行部分を河床面まで確認、貞觀16年の土石流跡を発見し、日本三代実録の「河水和沙」を実証した。また河川に降りる道が検出された。
15	平成元年 1989	大吉政雄氏宅建設に伴う発掘調査	指宿市	下山覚（指宿市教委）、渡部徹也（同上）	85	平成元年10月5日～平成2年12月10日	奈良～平安時代の建物跡、横列跡、墓跡などが発見された。また、古墳時代の集落跡が検出され、旧河川をはさんで2つの大きな集落跡があることが判明した。

No.	年	発掘調査事業名	調査主体	調査担当者	賄費額	調査期間	主な調査成果
16	平成2年 1990	新城勝剛氏宅建設に伴う発掘調査	指宿市	下山覚(指宿市教委) 渡部徹也(同上)	70	平成2年2月 1日～3月17日	貞観16年の噴火によって倒壊した建物跡の一部が検出され国指定史跡内に続くことが確認された。これによって、国指定史跡内も火山災害遺跡であることが確認された。
17	平成2年 1990	都市計画事業に伴う発掘調査(幹線道路部分)	指宿市	下山覚(指宿市教委) 渡部徹也(同上)	400	平成2年5月 1日～平成3年7月30日	古墳時代の集落跡、大規模な土器集中廃棄所(2ヶ所)、貝塚、道など様々な遺構と多量の遺物が検出された。平安時代では、島跡、道、建て物跡などが検出された。
18	平成2年 1990	下水道事業に伴う発掘調査	指宿市	下山覚(指宿市教委) 知花一正(同上) 渡部徹也(同上)	2300	平成2年7月 4日～平成3年9月17日	古墳時代の住居跡、土器集中廃棄所(4ヶ所)、平安時代の墓跡などが広範囲にわたって検出された。この調査によって旧地形の復元が概略的ではあるが可能となった。
19	平成3年 1991	都市計画事業に伴う発掘調査(10-1支線道路部分)	指宿市	下山覚(指宿市教委) 知花一正(同上) 渡部徹也(同上)	385	平成3年6月 7日～11月30日	貞観16年の噴火で埋没した畠、高床式倉庫跡、道、椎列跡などの生産遺構と関連施設が発見された。また、古墳時代では、土器集中廃棄所、貝塚、V字溝等が検出された。平安時代の遺構群については、工法変更によって破壊をしない形で保存することになった。
20	平成3年 1991	都市計画事業に伴う発掘調査(国道拡幅部分)	指宿市	下山覚(指宿市教委) 知花一正(同上) 渡部徹也(同上)	400	平成3年9月 27日～11月30日	古墳時代の集落の広がりが確認された。また、古墳時代の馬骨が出土した。旧河川が検出され、流路が確認された。
21	平成4年 1992①	重要遺跡範囲確認調査会	指宿市	下山覚(指宿市教委) 渡部徹也(同上)	340	平成4年2月 17日～3月31日	平安時代の墓跡、道、古墳時代の道、柱穴群が検出された。
22	平成4年 1992②～⑦	重要遺跡範囲確認調査	指宿市	下山覚(指宿市教委) 知花一正(同上) 渡部徹也(同上)	80	平成4年8月17日～平成5年1月26日	平安時代の墓跡、古墳時代の住居跡、道、土器集中廃棄所等の遺構が検出された。
23	平成4年 1992	国指定史跡環境整備事業に伴う住居跡確認調査	指宿市	下山覚(指宿市教委) 知花一正(同上) 渡部徹也(同上)	136	平成4年10月 21日～平成5年3月20日	電磁波探査を実施し、調査地点を選定、奈良～平安時代の堅穴住居2基を検出した。また、平安時代の樹木痕が確認された。
24	平成4年 1992	指宿市考古博物館建設予定地発掘調査	指宿市	下山覚(指宿市教委) 知花一正(同上) 渡部徹也(同上)	1500	平成4年7月～平成5年3月31日	旧河川と平安時代の墓跡が検出された。
25	平成5年 1993	指宿市考古博物館建設予定地発掘調査	指宿市	下山覚、中摩浩太郎 鎌田洋昭、渡部徹也(指宿市教委)	1500	平成5年4月～平成6年3月31日	旧河川と平安時代の墓跡、古墳時代の馬鍔状痕跡、弥生時代の土器集中廃棄所などが検出された。
26	平成5年 1993⑧～⑩	重要遺跡範囲確認調査	指宿市	下山覚、中摩浩太郎 鎌田洋昭、渡部徹也(指宿市教委)	80	平成6年1月 17日～平成6年3月31日	中世の墓跡、平安時代の道、古墳時代の道、柱穴などが検出された。

No.	年	発掘調査事業名	調査主体	調査担当者	費額	調査期間	主な調査成果
27	平成5年 1993	ふるさと歴史の 広場事業に伴う 確認調査	指宿市	下山覚、中摩浩太郎 鎌田洋昭、渡部徹也 (指宿市教委)	120	平成5年10月 ～平成6年3 月31日	奈良～平安時代の墓穴住居2基を確認した。
28	平成6年 1994	指宿市考古博物 館建設予定地発 掘調査(平成5 年度より継続)	指宿市	下山覚、中摩浩太郎 鎌田洋昭、渡部徹也 (指宿市教委)	1500	平成6年4月 ～平成6年5 月31日	旧河川、平安時代の畠跡、古墳時代の馬跡 状痕跡、弥生時代の土器集中廃棄所、縄文 時代の建物跡などが検出された。
29	平成6年 1994 ⑪～⑫	重要遺跡範囲確 認調査	指宿市	下山覚、中摩浩太郎 鎌田洋昭、渡部徹也 (指宿市教委)	101	平成6年7月 15日～平成7 年3月31日	中世～近世墓、古墳時代の住居跡、柱穴群 を確認した。
30	平成7年 1995 ⑬～⑭	重要遺跡範囲確 認調査	指宿市	下山覚、中摩浩太郎 鎌田洋昭、渡部徹也 (指宿市教委)	106	平成7年6月 28日～平成8 年3月31日	弥生時代終末～古墳時代の祭祀遺構、古墳 時代の柱穴群、平安時代の攝列跡などが検 出された。
31	平成8年 1996 ⑮、⑯	重要遺跡範囲確 認調査	指宿市	下山覚、中摩浩太郎 鎌田洋昭、渡部徹也 (指宿市教委)	50	平成8年12月 1日～平成9 年3月31日	基本層序の広がりと平安時代の樹木痕が確 認された。
32	平成9年 1997 ⑰	重要遺跡範囲確 認調査	指宿市	下山覚、中摩浩太郎 鎌田洋昭、渡部徹也 (指宿市教委)	50	平成9年7月 1日～平成10 年3月31日	基本層序の広がりと古墳時代の柱穴が確 認された。
33	平成10年 1998 ⑱	重要遺跡範囲確 認調査	指宿市	下山覚、中摩浩太郎 鎌田洋昭、渡部徹也 (指宿市教委)	50	平成10年7月 1日～平成11 年3月31日	平安時代の畠跡、古墳時代の柱穴を確認し た。
34	平成11年 1999 ⑲	重要遺跡範囲確 認調査	指宿市	下山覚、中摩浩太郎 鎌田洋昭、渡部徹也 (指宿市教委)	50	平成11年7月 26日～平成12 年3月31日	平安時代の畠跡、道を確認した。

## 第5章 調査成果のまとめ

橋牟礼川遺跡の遺跡範囲確認調査は平成4年度から開始され、今回の調査も含め、21ヶ所の地点について実施された。これまでの調査地点はFig.11、12の通りである。以下に、これまでの調査成果を振り返り範囲確認調査の総括としたい。

### 古墳時代の成果

昭和61年～平成3年にかけて実施された土地区画整理事業に伴う幹線道路部分の発掘調査で、古墳時代の竪穴住居群が密集していることが判明していた。その後、平成4～5年度にかけて実施した確認調査（①～⑦の地点）で、古墳時代の集落の中心が幹線道路（A）を含めた南北側に広がっていることが追認され、国指定史跡の追加指定を受ける学術成果の1つとなった。

周知の遺跡地周辺についても、古墳時代の集落が確認され、橋牟礼川遺跡との関連が注目された。⑪の地点では22基の竪穴住居が確認された。幹線道路部分で竪穴住居群が検出されていることから一連の集落の広がりと推測される。⑫の地点でも竪穴住居が確認されたが、橋牟礼川遺跡と離れていることから同時期の別の集落がある可能性を想定したい。⑬の地点では、橋牟礼川遺跡ではじめて土器埋納遺構と配石を伴う祭祀遺構が検出された。北側の国指定史跡内では住居群が確認されており、今後、集落内での祭祀のありかたを検討する上で貴重な成果を得たものと思われる。⑭、⑮の地点では、古墳時代の遺構は検出されなかった。⑯の南に隣接する道路部分（B）の発掘調査も平成6年度に実施されたが、古墳時代の遺構は、数基の柱穴を除いてはほとんどなく、幹線道路より続く集落の広がりは、⑯より西側の地点までであることが推測される。⑰では、柱穴群が確認されたが、前述の状況から橋牟礼川遺跡と一連の集落とは考えにくい。⑰の西側の丹波小学校内から多量の古墳時代の遺物が出土していることから、別の集落の存在があるものと考えたい。

### 奈良～平安時代の成果

橋牟礼川遺跡の特質の一つに火山災害遺跡である点が挙げられる。874年の火山噴火で埋没した遺構の広がりや状況によって当時の集落景観や災害状況の復元が可能であることがこれまでの調査でも明らかにされてきた。国指定史跡内では、Mkの直下からは畠がよく検出されるが、⑩や⑪などの周辺地域からも畠が検出され、畠地利用の広がりが確認された。国指定史跡の東側、⑭や⑮の近辺については、畠の検出が見られず、⑯では樹木痕跡も発見されていることから、比較的の海岸に近いエリアでは、畠が形成されていなかった可能性もある。

874年以前の奈良～平安時代の遺構を見ると⑭で柱穴群が、⑯では、杭列跡が確認されている。

⑨、⑩、⑪、⑫の地点では、奈良～平安時代、ならびに874年時点での遺構、当該期に該当する遺物の出土は見られなかった。

先に述べたとおり、Mk直下は、国指定史跡内で発見される遺構のほとんどが畠のため、確認調査には同時期の居住区域がどこかという集落状況を把握する上での課題があった。（⑯北側の幹線道路部分の調査で、埋没柱立柱建物跡の出土が見られたが、その広がりは正確には不明である）しかし、残念ながら①～⑩の地点からは874年時点での建物遺構の検出は見られなかった。今後、国指定史跡内の調査も含め居住域の確定が重要な課題の1つとして引き継がれよう。

### 今後の課題と展望

確認調査を実施したほとんどすべての地点において、MkおよびAkが堆積していることが判明した。古墳時代においては、橋牟礼川遺跡と周辺遺跡の集落の関連（時期や集落規模の比較など）を考慮しながら今後の研究を進めることが肝要であろう。奈良～平安時代については、874年時点での居住区域の確定やAk上面で検出される畠地に転用される前の建物遺構群の性格や広がりなどを把握する必要がある。

橋牟礼川遺跡の広がりについては、大枠ではあるが推定するにたる情報を得ることができた。今後、上記の課題を踏まえつつ、新たな視点を持って調査に望むことで、古墳時代の集落状況、古墳時代から奈良平安時代に至る文化変異の問題と律令制度との関連、災害遺跡としての特質等について、より有益な情報を引き出すことができるものと考えられる。

（文責 渡部）

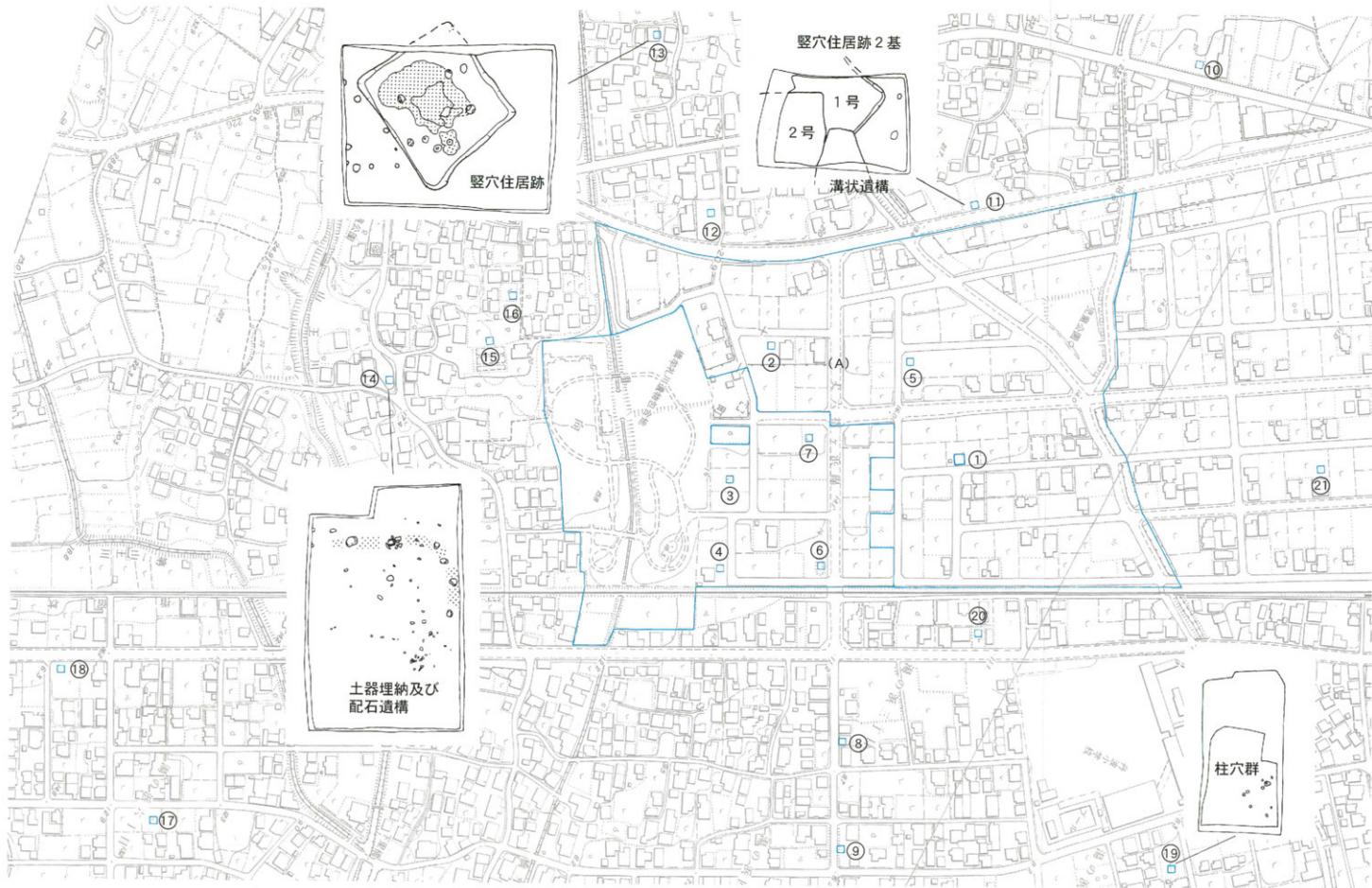


Fig.11 範囲確認調査地点と検出された遺構1(古墳時代の遺構)

図12 親園跡調査地点と検出された遺構2(平安時代の遺構)



# 敷 領 遺 跡 編



## 第1章 遺跡の位置と環境

敷領遺跡は、指宿市十町小字敷領周辺に広がる弥生時代から平安時代にかけての複合遺跡である。

遺跡は、指宿市街地が形成されている火山性扇状地のほぼ中央、海拔4~6m前後の標高にあり、火山災害遺跡として知られる国指定史跡指宿橋半札川遺跡の北北西約2kmの地点に位置する。敷領遺跡の位置する扇状地は、北側を流れる二反田川と南側を流れる柳田川にはさまれ、海岸にむかって緩やかに傾斜している。両河川ともに川幅

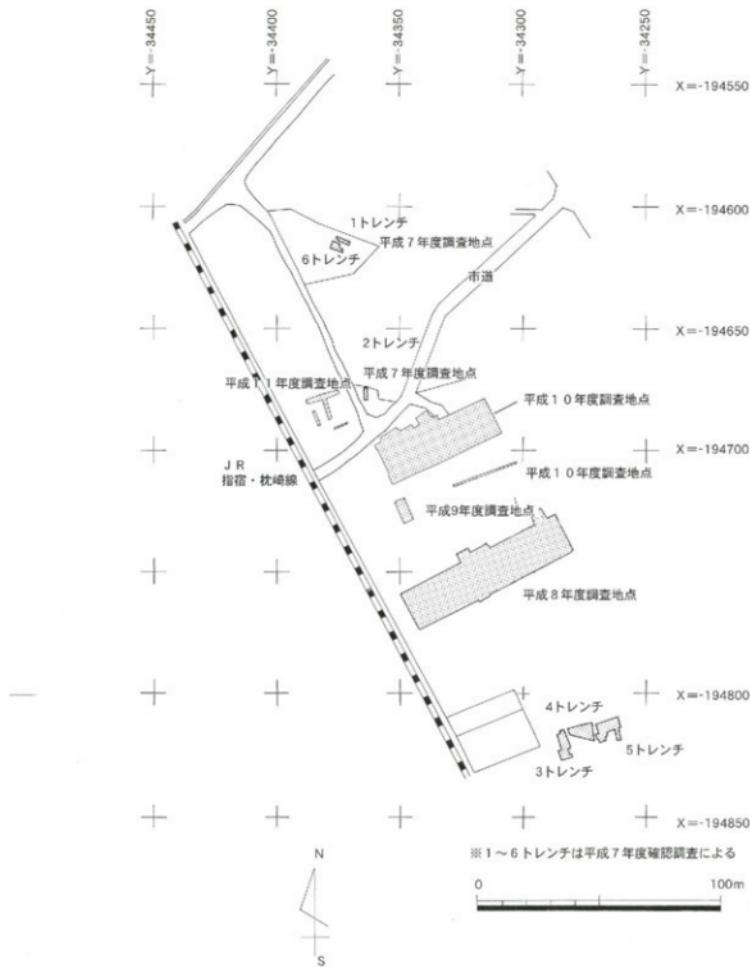


Fig. 13 敷領遺跡調査地点位置図 ( $S = 1/2000$ )

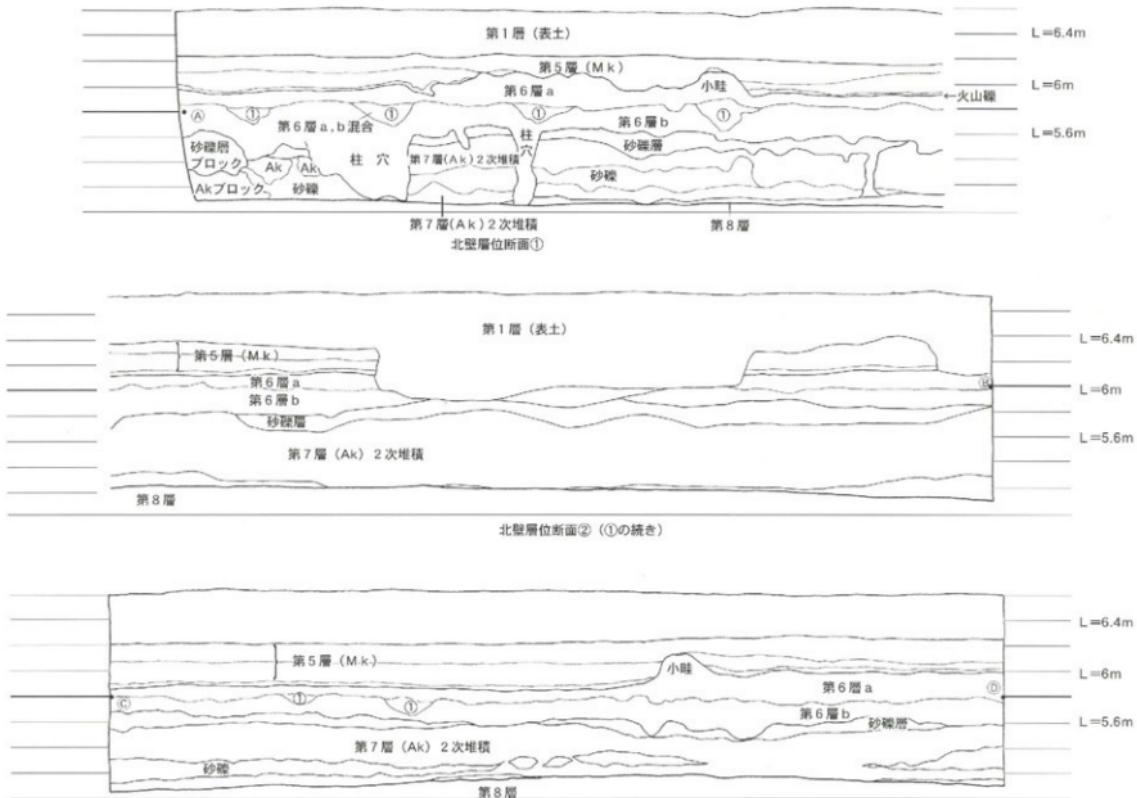


Fig. 14 調査区層位断面図 (S = 1 / 40)

が狭く、水量の少ない小河川である。調査地点から東に広がる海岸までは最短で約1.2km、西に約1kmで、標高250m前後の山並みの裾部にいきあたる。

敷領遺跡の発見は比較的古く、明治34年に壺形土器等が採集されたことによる。その後も大正13年に赤生土器や成式土器、打製石斧等が採集され、遺跡の存在が知られるようになった。本格的な調査は、平成7年度に指宿市教育委員会が実施した遺跡範囲確認調査に始まる。この調査で874年3月25日の開聞岳火山灰、通称「紫コラ」(以下Mkと表記)の直下から水田遺構が検出された。平成8年度には、公営住宅の建替え事業に伴い発掘調査が行なわれ、埋没した水田が面的に検出された他、奈良~平安時代の掘立柱建物跡、縦柱建物跡、多量の須恵器、土師器、墨書き土器など、官衙の色彩を帯びた遺物・遺構群が発見された。さらには、古墳時代の竪穴住居跡2基、弥生時代の竪穴住居跡1基が検出され、弥生時代から平安時代に至る複合遺跡であることが確認された。平成9年には、公営住宅に隣接する温泉タンクの設置に伴い発掘調査が実施され、Mkで埋没した水田が検出された他、Akの上面で奈良~平安時代の柱穴群が確認された。平成10年度には水田に加え、Akの直下から円墳が検出され、「弥次ヶ湯古墳」と命名された。今回は、敷領遺跡の北側への広がりとこれまで確認されている各時期の遺構の状況を把握することを目的に丁字のトレチを設定し、計40m<sup>2</sup>について確認調査を実施した。  
(文責 渡部)

(文責 渡部)

第2章 確認調査

## 第1節 遺構について

水田について

Mk直下の第6層上面で水田を確認した。ほぼ南北に伸びる小畦Aと東西に伸びる小畦Bが築造されており、延長すれば、直交するものと想定される。小畦Aは、幅30~40cmで、高さ約10cmを計る。溝渠区北側に近いところに

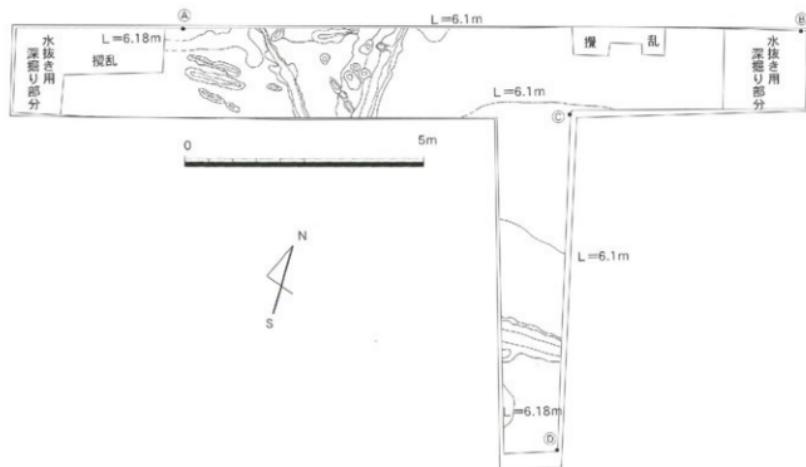


Fig. 15 第6層上面水田換出状況図 ( $S = 1/100$ )

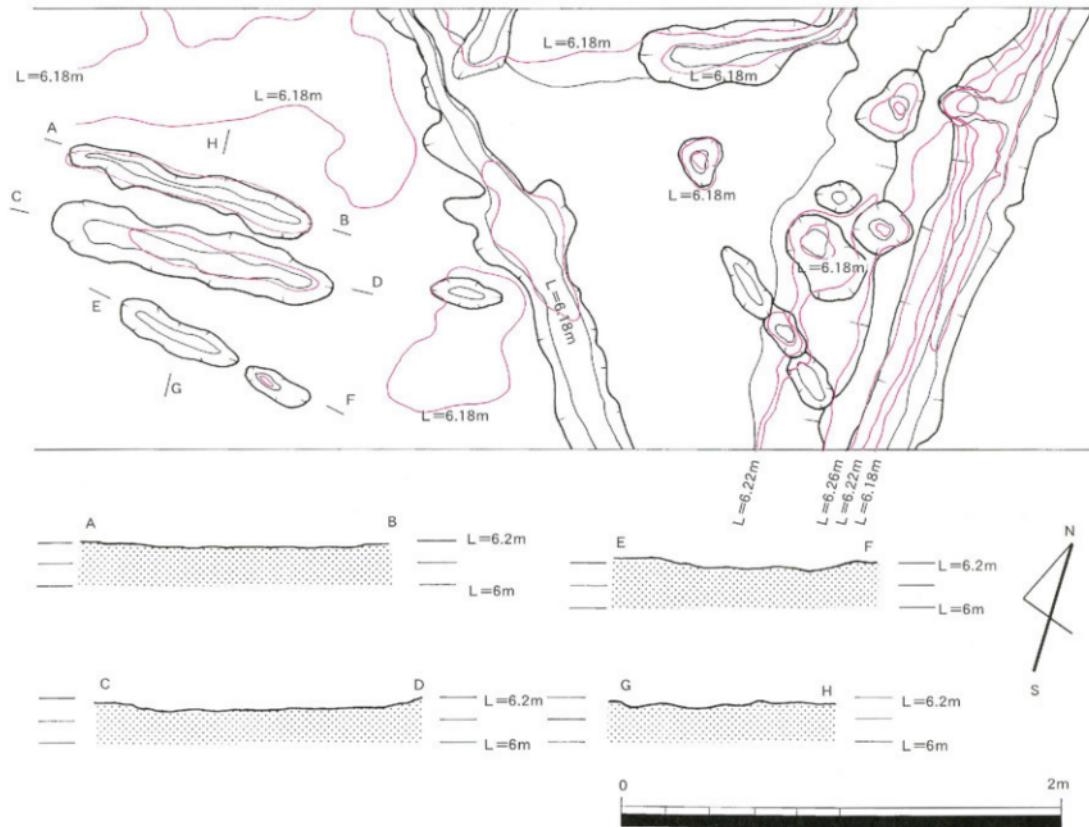


Fig. 16 水田平・断面図 (S = 1 / 25)

水尻があり、西から東への旧地形の傾斜に合せて水田が形成されている。水尻側の畦の下場は細い窪みがあり、畦を造り出す際に土壤を握って東側に盛ったことがうかがえる。小畦Aの西側田面には、北西から南東にのびる幅30cm前後の浅い窪みがある。窪みの底面は平坦で、若干の砂粒が堆積していたことから、流水痕跡の可能性がある。また、東西方向に伸びる3条の梢円状の窪みがほぼ平行して並んでいたが、耕具痕跡の可能性もある。

小畦Bは、幅25~30cm前後で、高さ約10cm計る。小畦Bを挟んで南側の田面が北側より若干高い。周辺の田面は平坦で、調査区の西側で確認されたような耕具痕跡の可能性を示す凹凸は看取されなかつた。

水田が形成されている第6層は、粘質のある黄褐色を呈した第6層aと還元土壌と考えられる暗オリーブ色を呈する第6層bに細分できる。第6層bの下層には砂礫層があり、その下層にA kの2次堆積層が積もっている。第6層bの上面で水田が形成された痕跡は確認されなかつた。

#### 第6層b上面で検出された耕具痕跡について

田面を掘り下げ、第6層bの上面を検出した段階で、第6層aと第6層bの混在する土壤を埋土とする溝状遺構が確認された。小畦Aの西側では、4条の溝状遺構が確認された他、小畦Aの東側でも、西側の溝に平行するよう梢円形の浅い窪みが確認された。溝状遺構の幅は20~30cm程度で、深さ10cm前後を計る。断面は浅いU字からV字状を呈し、底面の起伏が激しい。小畦Aの西側で確認された4条の溝状遺構は、70~80cmの間隔をもって並んでいる。小畦Bの北側にも2条の溝状遺構が確認された。遺構の間隔は約1mと広い。これらの溝状遺構の性格については、間隔やその形態から、畠地利用していた時期の畾間の耕作痕跡の可能性が考えられる<sup>(1)</sup>。敷領遺跡では、平成8年度、10年度の調査で、水田の隣接地に畠が形成されていた事例があり、水田を畠地に造り替えている時期があることが判明している。小畦Bに平行する溝状遺構の間隔は約1mと広いが、小畦Aに平行する溝状遺構の間隔は敷領遺跡で検出されている畠の畾間の間隔とほぼ一致する。

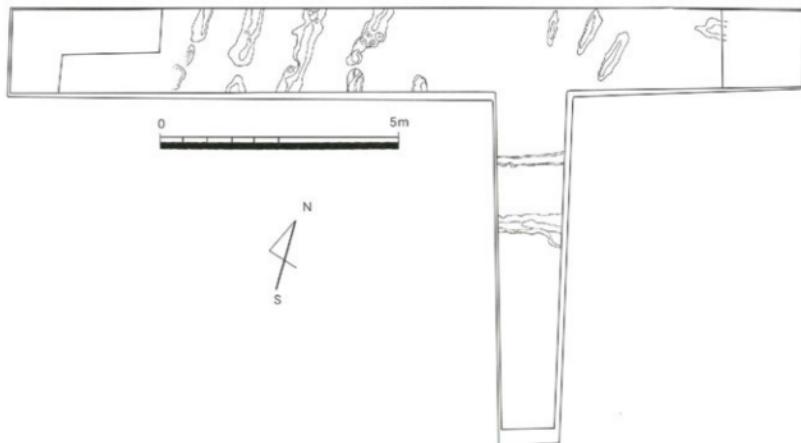


Fig.17 第6層上面で検出した溝状遺構

注(1) 下山 覚の教示による。

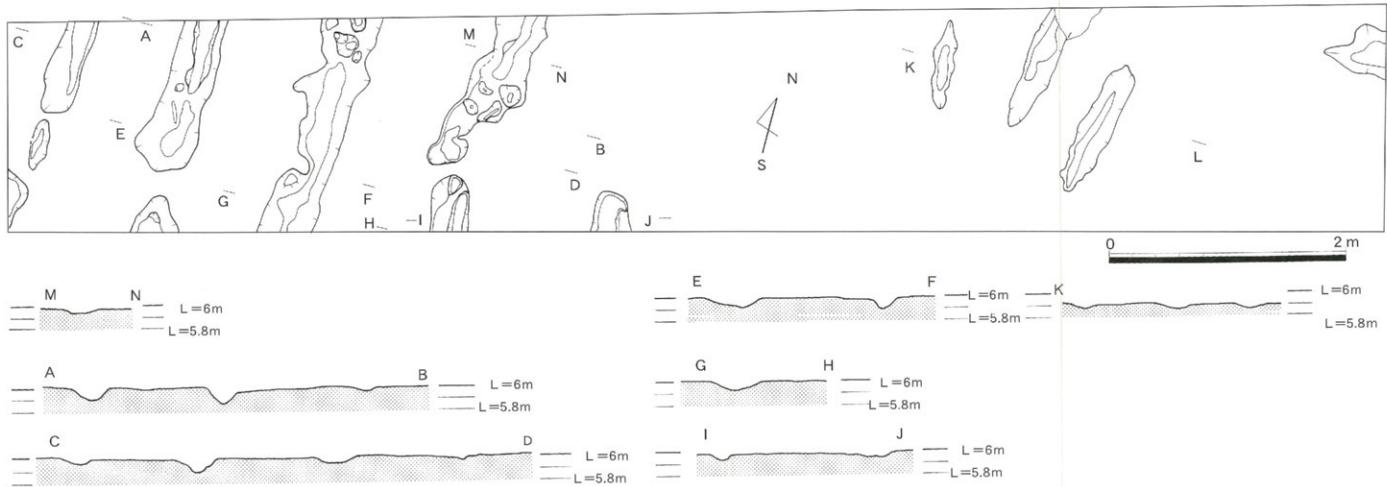


Fig.19 第6層b上面で検出した溝状遺溝平・断面図② (S = 1/25)

東壁断面図の範囲

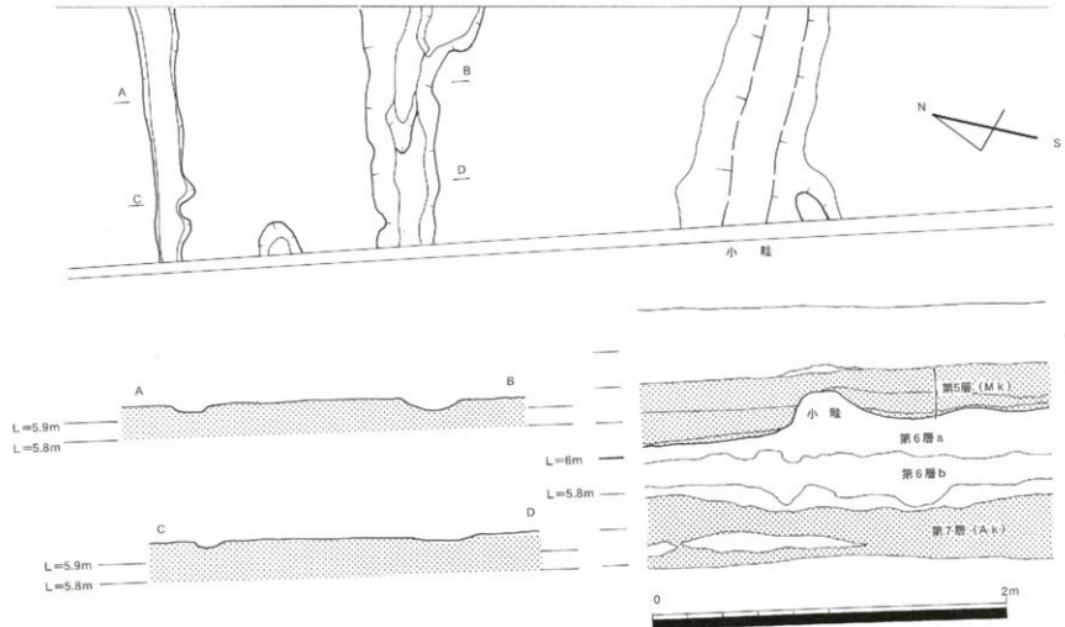


Fig. 18 第6層 b 上面で検出した溝状遺溝平・断面図① (S = 1 / 40)

### 第7層（A k）上面で検出した柱穴群

第7層上面で8基の柱穴を確認したが、調査範囲が限られていたこともあり、プランは確認し得なかった。調査区南側の平成10年度までの調査地点からも同時期の遺構群が検出されていることから、一連の集落の広がりと推定される。なお、A kを除去し、埋没古墳の存否を確認したが、直下の地層にマウンド、周溝等と推定されるような起伏は見られなかった。

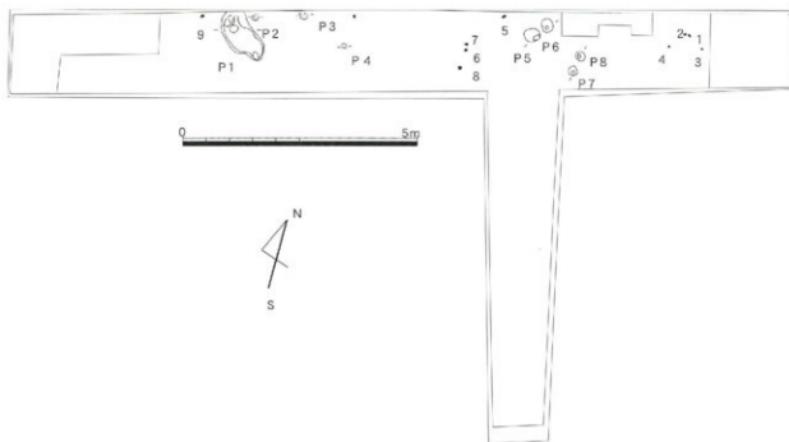


Fig. 20 第7層（A k）上面で検出した柱穴と第6層遺物出土状況図 ( $S = 1/100$ )

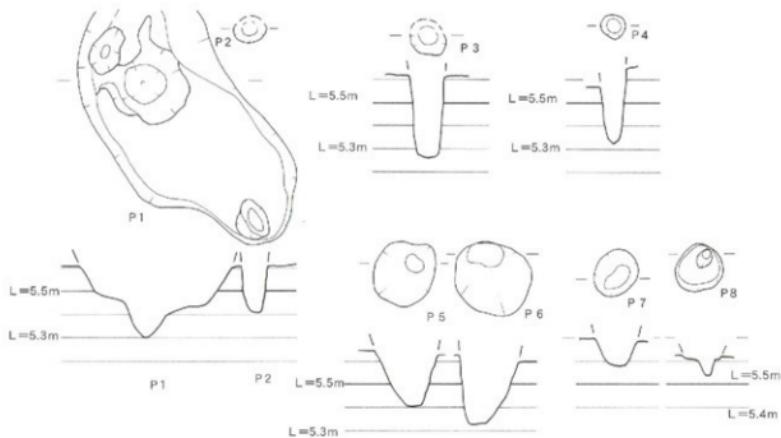


Fig. 21 第7層上面で検出した柱穴平・断面図 ( $S = 1/20$ )

## 第2節 遺物について

第6層は、7世紀代4四半期に比定される第7層と874年3月25日（貞觀16年3月4日）に比定される第5層とにパックされた上層で、Mkの堆積後は土壤の生成が中断されている。よって、第6層中に包含される遺物については、Mkの搅乱が行なわれていない限り874年という下限が与えられる。また、第6層には、層の生成期間に行なわれた人為的・自然的な搅乱・堆積によって、第6層が生成された年代以前に帰属する遺物が包含されることもある。

### ①須恵器壺 1

1は壺肩部の破片である。内面には青海波文が若干残り、外面には格子目タタキが施されているが、内外面ともに磨滅が激しく、不明瞭である。

### ②須恵器壺 2

高台のないタイプの須恵器壺である。破片資料のため詳細は不明である。

### ③須恵器壺 3

須恵器壺口縁部の破片である。受部の立ち上がりの痕跡が確認された。

### ④土師器壺 4～7

土師器壺の口縁部破片である。4、5は口縁部が外反し、胴部内面はヘラケズリが施されている。

### ⑤土師器皿 8

8は、土師器皿の口縁部破片である。摩滅が著しく調整痕は不明瞭である。

### ⑥土師器壺 9

9は高台をもつタイプの土師器壺である。内外面ともに磨滅が激しい。

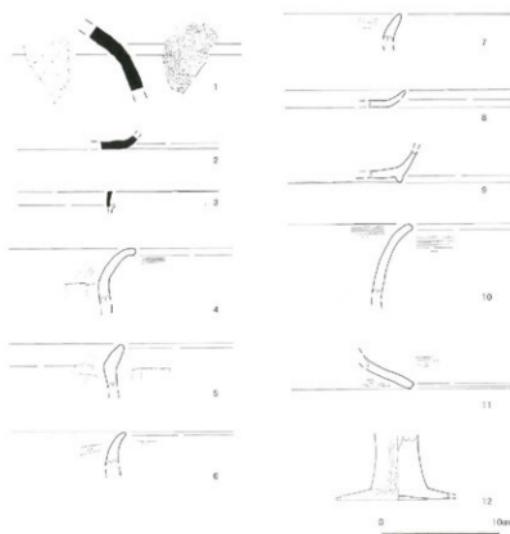


Fig. 22 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

## ⑦古墳時代の土器 10~12

10は「成川式土器」の甕の口縁部破片である。11、12は「成川式土器」の高坏の脚部破片である。12はミガキが施され、赤色塗彩がされている。

(文責 渡部)

## 第3章 調査成果のまとめ

今回の調査で、敷領遺跡の埋没水田の広がりと奈良～平安時代にかけての集落の広がりを確認することができた。調査地点は、弥次ヶ湯古墳が発見された地点から30m程北東にあたり新たな古墳の発見も期待された。トレンチ周辺にも2個所の試掘穴を設定しA点まで除去したが古墳は検出されなかった。

敷領遺跡には、弥生時代、古墳時代の住居跡、円墳、奈良～平安時代の集落、そして火山災害による埋没水田と複数の時期、多岐にわたる情報が埋蔵されている。南九州の古代史の解明に寄与するために引き続き問題意識を持った調査の継続が望まれる。

(文責 渡部)

表2 遺物観察表

図番	取上げ NO	器 種	残存法量	部 位	色 外	色 内	色 肉	色 他	胎土粒	混和材	調 整	その他の
1	1	須恵器	破片	甕・肩部	2.5Y7/2 10YR7/2	2.5Y6/1 10YR7/2	-	微砂粒を若干含む	七黒外	内・回転ナデ・青海波タタキ 外・回転ナデ格子目タタキ	-	良好
2	一般	須恵器	破片	甕・底部	N5/0	N5/0	N5/0	N5/0	微砂粒を若干含む	白黒外	内・回転ナデのらナデ 外・回転ナデのらナデ	良好
3	一般	須恵器	破片	甕・口縁部	N4/0	N5/0	N6/0	-	微砂粒を若干含む	白黒外	内・回転ナデ 外・回転ナデ 口唇・ヨコナデ	良好
4	6	土器器	破片	甕・口縁部	2.5YR6/6 7.5YR6/4	2.5YR6/6 5YR6/6	2.5YR6/6	-	砂粒を若干含む細・微 砂粒を含む	白黒セ カ外	内・工具によるナデのちナデ、 ヘラケズリのちナデ 外・工具によるナデのちナデ 口唇・ヨコナデ	良好
5	一般	土器器	破片	甕・口縁部	2.5YR4/4	5YR3/3	5YR5/4	-	砂粒を若干含む微砂粒 を含む	白黒セ カ外	内・工具によるナデのちナデ、 ヘラケズリのちナデ 外・工具によるナデのちナデ 口唇・ヨコナデ	良好
6	9	土器器	破片	甕・口縁部	10R4/4	10R6/6 2.5YR3/2	2.5YR4/4 5YR3/1	-	細・微砂粒 を微量含む	白黒セ カ外	内・工具によるナデのちナデ 外・工具によるナデのちナデ 口唇・ヨコナデ	良好
7	一般	土器器	破片	甕・口縁部	10R4/4	2.5YR5/4 10R3/2	2.5YR6/6 10R3/1	-	砂粒を若干含む細・微 砂粒を含む	白黒セ カ外	内・工具によるナデのちナデ 外・工具によるナデのちナデ 口唇・ヨコナデ	良好

図番	取上げ NO	器種	残存法量	部位	色外	色内	色肉	色他	胎土粒	混和材	調整	その他
8	10	土師器	破片	里・口縁部～底部	2.5YR7/8	2.5YR7/8	2.5YR7/8	2.5YR7/8	砂粒を若干含む細・微砂粒を含む	白黒セカ外	内・ナデのちマメツ 外・ナデのちマメツ	良好
9	4	土師器	破片	坏・底部～脚部	5YR7/6 7.5YR7/3	7.5YR7/4	5YR7/6 7.5YR7/4	7.5YR7/3 5YR7/6	微砂粒を若干含む	白黒外	内・回転ナデのちマメツ 外・ナデのちマメツ 高台・ヨコナデのちマメツ 高台見込み部・工具によるナデのちマメツ	良好
10	一般	壺(成川式土壺)	破片	口縁部	10R5/6 2.5YR6/4	2.5YR5/ 45YR5/1	10R5/6 10Y7/1	-	砂粒を若干含む細・微砂粒を含む	白黒セカ外	内・工具によるナデのちナデ 外・工具によるナデのちナデ 口唇・ヨコナデ	良好
11	一般	高坏	破片	底部	2.5YR6/4 10R6/6	7.5YR7/6 N6/6	10R5/6 7.5Y6/1	-	砂粒を若干含む細・微砂粒を含む	白黒セカ外	内・工具によるナデのちナデ 外・工具によるナデのちナデ 口唇・ヨコナデ	良好
12	一般	高坏	底・1/2 残存底・ (復元) 9.3cm + e	脚部	7.5R3/4	-	10R6/6 2.5YR4/1	桶内 10YR5/6	砂粒・微砂粒を若干含む	白黒セカ外	内・回転ナデ 外・ミガキのち赤色塗彩 脚内・ナデ	良好

# 殿 樣 湯 跡 編



## 第1章 遺跡の位置と環境

殿様湯跡は指宿市西方二月田に所在する島津家の行館跡の一部、浴場跡をさす。殿様湯の所在する二月田周辺は、二反田川流域に広がる田畠が営まれる低地である。殿様湯跡は河口から約2kmほどさかのぼった二反田川沿いに残存する。時の藩主が館舟を使って、川沿いにこの地に湯治にきたとの伝承も残り、二反田川の両岸には1843年に施工された護岸工事の石積み堤防がある。



Fig. 23 殿様湯跡位置図 ( $S = 1/2500$ )



Fig. 24 調査地点位置図 ( $S = 1/500$ )

島津氏の行館は、第19代光久の時、摺ヶ浜に設置され、元禄17年（1703年）に廃止、その後、寛政9年（1797年）長井ノ湯に建てられた。天保2年（1831年）には第27代斉興が現在の二月田に行館を移したといわれる。

現存する浴場跡は、昭和46年、「殿様湯跡」の名称で指定文化財として登録されている。

今回は、1箇所トレンチを設定し、浴場付近に行館の遺構が残存しているかどうかを確認した。

（文責 渡部）

## 第2章 確認調査の概要

石造りの浴場の南側隣接地に、 $1.5 \times 5\text{ m}$ のトレンチを設定した。約50cm掘削したところで激しい湧水が見られ調査の継続が困難となった。なお、遺構・遺物は見られなかった。

現存する浴場は、第2次大戦前までは、地権者の屋敷の一部として利用されており、近現代の建築物が建っていた。その影響もあってか、近世の包含層に該当すると推定される地層を確認することができなかった。浴場入り口のレベルが現地表面とほとんど変わらないことからも周辺についてはすでに遺構が失われている可能性もある。

天保年間の指宿地方は、殿様湯（行館）の建設をはじめ、二反田川の護岸工事、濁川橋（石橋）の建設、宮ヶ浜三日月突堤（堤防）の建設と大規模な工事がいついでおり江戸期の遺構が残存している。

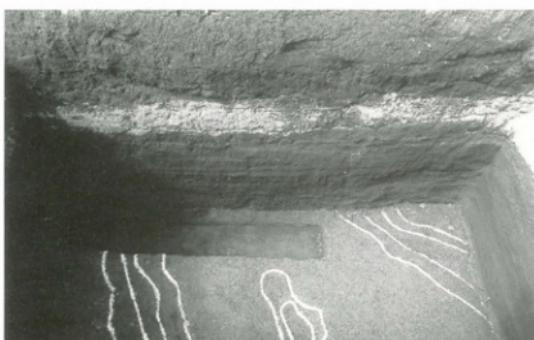
期待された成果は得られなかつたものの、今後、これら遺構群の関連や詳細を把握する上で継続した調査研究が期待される。

（文責 渡部）

PL. 1 橋牟礼川遺跡確認調査地点



1 調査区全景



2 層位の状況  
(M k の2次堆積がみられる)



3 島及び道跡遺構検出状況

PL. 2 敷領遺跡確認調査地点



1 第6層上面検出状況



2 小畦検出状況



3 小畦・田面検出状況



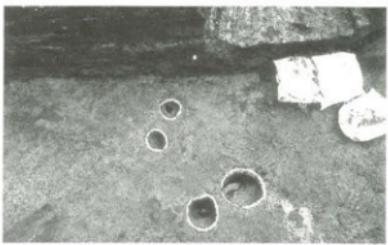
4 小畦検出状況



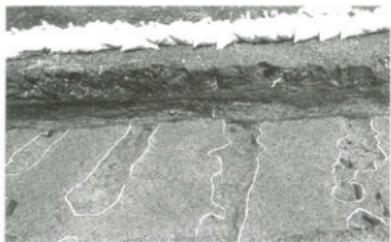
5 起耕痕跡検出状況



6 起耕痕跡①（西から）



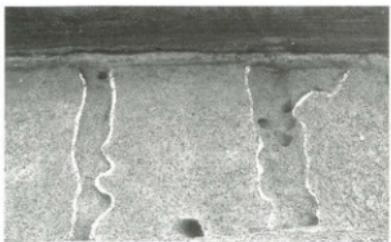
10 A k 上面で検出した柱穴②



7 起耕痕跡②（南から）



11 層位の状況①（南から）



8 起耕痕跡③（拡張区、西から）



12 層位の状況②（南東から）



9 A k 上面で検出した柱穴①



13 層位の状況③（拡張区、南から）

### PL. 3 殿様湯跡確認調査地点



1 トレンチ完堀状況  
トレンチの奥北側に  
殿様湯跡が残る



2 殿様湯清掃作業状況



3 殿様湯全景（東から）

PL. 4 敷領遺跡出土遺物



1



4



2



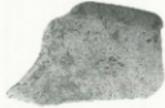
5



6



3



7



8



10



12

## **Summary of the Hashimuregawa arcaeological site**

The Hashimuregawa arcaeological site is located in Ibusuki-city, at the southern most tip of Kyushu Island.

One point from about 400m north of the National site was excavated to investigate the area. Part of the field that had been buried by the 874 A.D eruption of Mt.Kaimondake was found in this excavation. However we had been not able to confirm to the communities living area at this site, as of the 874 A.D.eruption

During investigations from 1994 - 2000 the area of this site was confirmed, however because there were no indications of the communities presence, we are unable to draw conclusions about the lifestyles of the communities inhabitants from the Kofun to the Heian period.

## **Summary of the Shikiryo arcaeological site**

The Shikiryo arcaeological site is located in an alluvial fan about 2km northwest of the Hashimuregawa arcaeological site. The first excavation of this site by the Ibusuki Board of Education began in 1995. Excavations on 40m<sup>2</sup> of the northward expanse were carried out.

Paddy fields and two small ridges that had been buried by the 874A.D eruption of Mt.Kaimondake ware found in this excavation. Also discovered ware trace of plowing which made the furrows under the rice fields. From this we concluded that the area had been a field before being paddy fields.

In addition, some pits which were part of the communities shacks were uncovered. This would date from the Nara to the Heian period.

The Shikiryo arcaeological site is considered an important site which can be studied to understand the changing of the methods of the utilization of land from the Nara to the Heian period.

## **Summary of the remains of Tonosamayu**

The remains of Tonosamayu are located in Nigatsuden at the northern area of an alluvial fan in Ibusuki city.

The remains of Tonosamayu was a stone bathhouse, which supposedly was a part of villa built by the Nariaki Shimazu, the 27th feudal lord of the Satsuma clan in 1831.

We excavated on 7.5m<sup>2</sup> area near the stone bathhouse to look for the trace of the villa. No trace were found. There fore, we were unable to confirm the existence of that paricular villa.

(Original Tetsuya Watanabe Proofreading Nikolai Piper Basalaj)

## 報告書妙録

ふりがな	はしむれがわいせき・しきりょういせき・とのさまゆあと							
書名	橋牟礼川遺跡Ⅵ・敷領遺跡・殿様湯跡							
副書名	遺跡範囲確認調査報告書							
卷次	15							
シリーズ名	指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第32集							
著編者名	下山 覚、中摩 浩太郎、渡部 健也、鎌田 洋昭							
編集機関	指宿市教育委員会（指宿市考古博物館 時遊館COCOはしむれ）							
所在地	鹿児島県指宿市十二町2290							
発行年月日	西暦1999年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はしむれ 橋牟礼川遺跡	じゅうにちょう 指宿市十二町	46210	233					
しきりょう 敷領遺跡	じゅうちょう 指宿市十町		284			1999.7.26 / 2000.3.31	35	範囲確認
とのさみゆあと 殿様湯跡	にしかたにがつでん 指宿市西方二月田		238					
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				特記事項	
橋牟礼川遺跡	生産集落	874年 奈良 ~平安	畠地					
敷領遺跡	生産集落	874年 奈良 ~平安	水田 柱穴群	須恵器、土師器、石器など				
殿様湯跡	浴場跡	近世						

橋牟礼川遺跡XV  
敷 領 遺 跡  
殿 様 湯 跡

2000年3月

発 行 鹿児島県指宿市教育委員会  
指宿市十二町2290  
☎ 0993-23-5100  
印刷所 有隣会社 イースト朝日  
鹿児島市谷山中央6-32-5  
☎ 099-266-5522





